

## 市民の原点に立って

参加型システム研究所理事長 神奈川大学名誉教授 橘川 俊忠

### 蔓延する自国第一主義

イギリスのEUからの離脱の是非を問う国民投票は、僅差とはいうものの離脱派の勝利に終わった。この離脱派勝利の要因やイギリス社会、ヨーロッパ諸国、さらには世界全体に及ぼす影響についてはすでに様々に論じられているが、それについては誌面の余裕もないのでここでは触れない。ただ、一つだけ触れておきたいのは、今世界中に蔓延している「自国第一主義」との関連の問題である。

アメリカでは、アメリカ第一主義を掲げるトランプが、大方の予想を覆して共和党の大統領候補になることは確実になった。ドイツ、フランス、イタリア、デンマークをはじめヨーロッパの多くの国で、移民・難民問題をきっかけとして排外主義の勢力がかつてない勢いで台頭してきた。ロシアや中国も、「帝国」復活の動きを強めているように見える。憲法を改正し、戦争のできる国にしようという人物が総理大臣になっている日本も例外ではない。イギリスの今回の決定は、そうした世界の流れを確実に加速させる。それは、世界を第二次世界大戦前の敵意と暴力に満ちた国際関係に引き戻すことすら予感させる。もちろん、現在の国際関係の基盤となっている経済的関係は、当時とは明らかに異なっている。したがって、対立の性質はもっと複雑になってはいるが。

### 横行する短絡的・煽情的言語

いずれにしても自国第一主義の蔓延は、国際関係に重大な緊張をもたらす。そして、その緊張は自国第一主義者達の過激な言動でさらに強まる。彼等にとっては、緊張が高まること自体が自らの勢力拡大のチャンスを増大させるから、その言動は際限なく過激化する。こうして危機は、まず言説の中で作り出される。

残念ながら、現在の世界は、危機に仕立てることが可能な紛争・対立の種に事欠かない。彼等は、その小さな種を誇大に吹聴し、不安感を醸成する。いったん醸成された不安感は、危機に陥らないという絶対的な保証が与えられない限り、簡単には拭い去れない。彼

等がその不安感に与える処方箋は、国家や国民、民族という集団への所属感情であり、軍勢力という力の論理である。

こうした自国第一主義者の言動には、大きな特徴がある。第一に、問題を単純化することである。たとえば、国家の安全保障問題を、家庭の防犯対策にたとえるように。第二に、特定の「敵」を作り上げる。その場合、根拠のない優越意識をあおり、差別を助長する。第三に、事態悪化の原因を敵の「陰謀」のせいにする。それによって、複雑な問題を認識しようとする知的作業から人々を遠ざける。ようするに、その特徴は、短絡的かつ煽情的だということである。

### 一人の人間として、市民として

少し深く考えれば、事態は自国第一主義者達の言うような単純なものではないということは分かるはずである。しかし、きっちりと反論しろと言われて完璧に論破できる自信のある人は、そんなに多くはない。完璧に論破して相手の考えを変えさせるためには、あらゆる情報を収集し、それを正しく分析する能力、それから考えを変えさせることができる説得力、そのすべてを兼ね備えることが必要だが、そんな力をすべて身につけることはほとんど不可能であろう。

しかし、彼等の言説に惑わされない立脚点に立つことはできる。その立脚点は、国家や国民・民族のような集団的帰属意識にすぎるのではなく、一人の人間、一人の市民としての自覚を持つことにある。そして、その自覚に立って、同じ人間、市民としての他者に対する想像力を持つことにある。子育てや介護の体験のある人には分かることと思うが、一人一人の子供や要介護者がいかに人それぞれであることか。そういう日々の具体的問題に対応しようとする努力の中で他者に対する想像力は養われる。「神は細部に宿りたもう」という言葉が示すように、大きな物語によって現実を理解しようとするよりも、小さな日々の体験を経験として一般化し、そこから世界を見る方がはるかに現実に向かえることができるのではないだろうか。

(きつかわ としただ)